

平成27年7月15日

各 位

郡上郷土史研究会 石神堯生

会誌『史苑やまと』送付について

この度郡上郷土史研究会では、会誌『史苑やまと10号』（最終号）を発刊しましたのでお届けします。ご笑覧いただければ幸甚に存じます。

実は会誌の巻頭言にもありますように、本研究会は平成27年3月を以て、約25年の活動に終止符を打ちました。従って会誌も今回が最後となりました。この間に会員はもとより、郡上市内外の多くの郷土史愛好家の皆様方にご支援をいただき、今日まで微々たる活動ではございましたが、継続してこられたことにたいし厚くお礼申し上げます。

解散に関してはやむを得ざる理由もありますが、ここにいたって反省することは、果たして結成当時の所期の目的は達成できたかということです。その点を検証するとやや後ろめたいところもあります。つまり『大和町史』で解明できなかったことあるいは扱いきれなかったところを究明するという課題は、道半ばという懸念も拭い切れません。この点諸先輩や会員のみなさまに申し訳ない気がします。

もう一点気になっているところは、千葉県東庄町の方たちの熱いお心に十分お応えできなかったことです。東庄町の方々は、私たち郡上在郷の者たちの友好の気持ちを遙かに超える強い同郷意識というか絆を保持しておられます。私自身が会長を担当しておりました10年間でも、延べ100人近い東庄町民の皆さまにご来町頂けました。また東庄郷土史研究会の会員様におかれては、毎年明建神社の七日祭りはもとより平素も折を見て来町の栄を賜っております。毎年『東庄の郷土史』を数十冊ご送付くださり、東庄町の隆盛ぶりは羨望の的ですが、対する吾が郷土史が均衡を維持できなかったことを、残念で申し訳なく思っております。長年懇意にして頂いた、吉田仁様、土屋清実様、上代義正様、海上義治様、飯田篤永様などからいただいたご書簡なども保管しております。近年は林俊之様にも頻繁にお越しいただき、「東氏の道 東庄から郡上へ」という史論を拝読致しました。

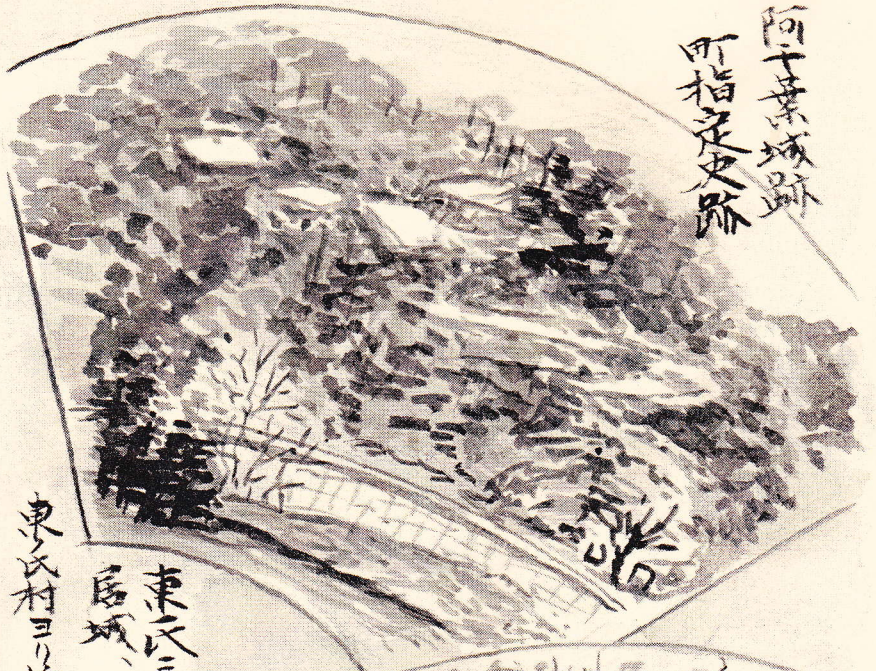
東庄町の皆さま、本当に長い間お世話になりありがとうございました。ご恩に報いることが出来なくて、申し訳なく思っております。もちろん今後も今まで以上にご懇意にさせていただきますようお願い申し上げます。

以上駄文ではありますが、会誌送付のご挨拶に代えさせていただきます。



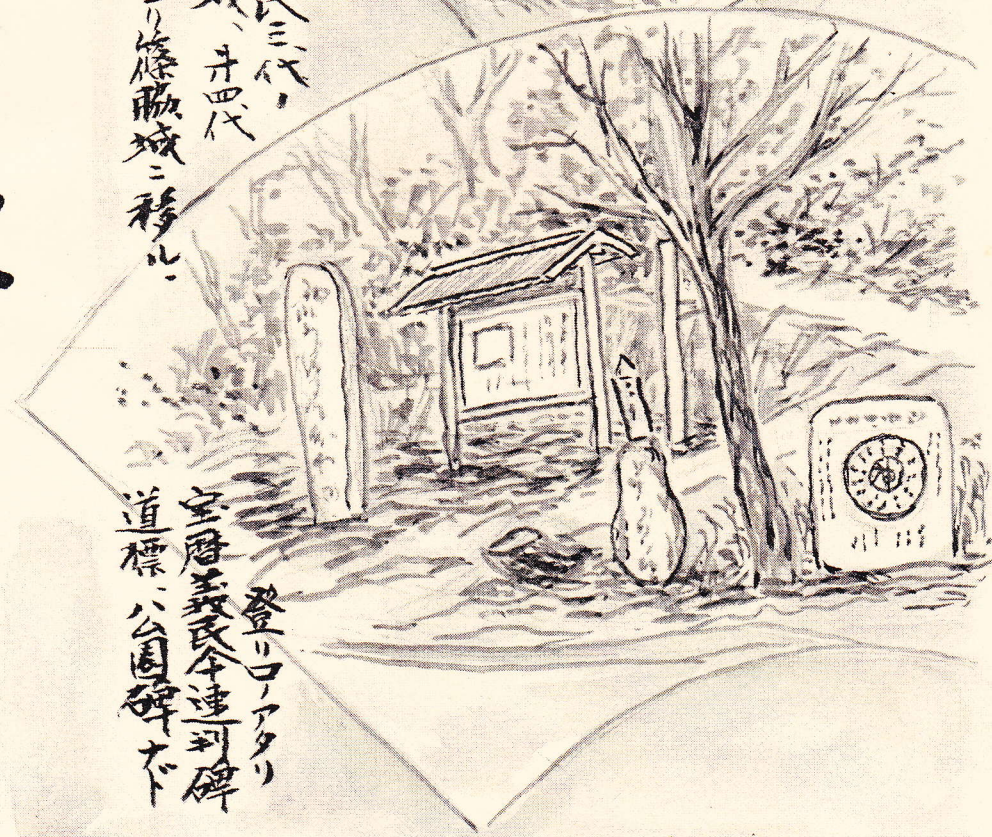
# 史苑やまと

阿葉城跡  
所指定史跡



東氏三代、  
居城、井四代  
東氏村ヨリ藤原城ニ移ル

登リコノアタリ  
室曆義民今連到碑  
道標公園碑下







## 『史苑やまと10号』（最終号）の発刊にあたって

会長 石 神 堯 生

はじめに

二年に一回定期的に発行しております『史苑やまと』ですが、母体である郡上郷土史研究会は、実は残念ながら本年3月に会を閉じることを決めております。このことは全会員にはお詫びに加えて会を解散する旨を通知し、ご理解を得ました。会員の高齢化に伴って活動も停滞しがちで、研究態勢も整わず会誌発行も目途が立たなくなり、解散やむを得ずという結論に達しました。会誌は最後の第10号を最終号として発行することにしました。

原稿は幸いにご覧いただくように、少ないながらもいずれも郷土史として価値ある史料を掲載することが出来ました。特に今回は、戦前に満蒙開拓青少年義勇軍として渡満しさらにシベリア抑留も体験された和良町在住の藤村治一氏（八十九歳）の貴重な手記がこの会誌に掲載させていただくことになりました。また本会会員の郷土史家佐藤光一さんには、郡上史を考えるうえで近世・近代史にとって重要な史実でありながら、見落とされがちであった「凌霜隊」を語る上での「凌霜」という言葉の意味するところを追及していただきました。以上のように今回は前回に比べ小規模のきらいはありますが、研究誌の体裁を整えることが出来たことを幸甚に思います。

振り返って

大和町郷土史研究会が発足したのは、平成2年12月でした。『史苑やまと』創刊号は、平成7年3月に発刊されました。そして今日まで約20年を経過し、閉じることになったのです。この間に3人の会長が就かれ、最初のころは会員も40名でしたが、時とともに変遷し、今では20名になっております。『大和町史』（全3巻）の編纂は、昭和44年から始まり19年の歳月をかけて昭和63年に一応完成しました。大和郷土史研究会は、『大和町史』の後を捕逸する目的で発足したのですが、初期の目的は達成されたでしょうか、今会を閉じるに当たり、反省を込めながらあるいは責任を感じながら、振り返っております。長い間支えていただきありがとうございました。



## 北辺の荒野に消えた吾が青春の挽歌

— 自分史の内より —

藤村治一

## 第一章

## 一 義勇軍応募の発端

一九二九（昭和四）年、世界的大恐慌の波は日本経済を直撃し、その中でも特に私の生まれた山村の農民の暮しは、「赤貧洗うが如し」などと言われる言葉のように、慢性的な貧困に呻吟していた。

現金収入といえは、婦女や老人は僅かばかりの養蚕や自家消費の畑作に従事し、男手は炭焼きや馬車引き、その他山林の仕事ぐらいで、細々と暮らしていた。貧しい暮しの中では、少々の病気で医者にもかからなかった。いや、かかれなかったのである。また、食生活の貧しさから、肺結核を患う者が多く見られた。娘のある家では、尋常小学校高等科二年の義務教育を終えるのを待ちかねるようにして、岐阜や名古屋などの都市の紡績工場や糸引

き女工として奉公に出し、盆や正月に娘たちの持ち帰る給料を当てにして待つている親が普通であった。

私の家も例外であろうはずもなかった。父は木挽や馬車引きで、母が畑作や養蚕で生計を立てていた。「貧乏人の子沢山」と言われたように、八人もの子どもがあった。私が小学校六年生で一番下の弟が数えの二歳のときに、あろうことか父は過労から病気になる四十八歳の若さで他界してしまった。我が家を襲った大変不幸な出来事であった。今の医学なら治すことができたと思えるが、悔やまれてならない。七十歳近い祖母を頼りに、まだ二十歳そこそこの長男を頭にこの先どうして生きていこうか途方にくれて泣く母の姿が今でも思い出されて、忘れることができない。

そんな時代、時の政府は、日本は国土が狭いうえに人口が多く、しかも資源が乏しいから国民は貧しい暮らししかできないのだ、と勝手な理由をつけて中国満州を手中にしていた。それには長い経緯と複雑な理由があるが、子どもだった私は知るはずもなかった。

政府はその満州の地を、日本の植民地として不動のものにすべく移民計画を立て、特に貧農をターゲットにし、各町村に割り当てられるくらいにして、百万戸の分村移民を奨励していた。その中には、被差別部落の人たちも多かったと聞いていた。

最初の満州移民開拓団は、昭和七年頃、試験的に在郷軍人を募って送り込む武装移民の形を取ったが、一九三六（昭和十一）年

に広田弘毅内閣が二十か年で百万戸を送り出す計画を決定した。

入植地は、現地の中国人の農地を強制的に買い取り農民を追放して入植したため、恨みを持つ満州人は、「抗日組織」いわゆる匪賊などになって開拓団を襲撃し殺害などが相次いだ。第一次武装開拓団は弥栄開拓団と名づけて、昭和八年にソ満国境近くのチフ力川流域に入植したが、治安は極めて悪かった。しかも、冬期には零下四十度以下にも下がる所で、農業で自活することは困難を極めた。特に妻帯者などは、ひどいホームシック（屯墾病と言った）に罹り、帰郷したり転職したりして日ごとにその数を減らし、ついに破綻し、良い結果は得られなかったという。

そこで登場したのが、満州移民の父の異名を取った関東軍の将校の東宮鉄男トウミヤカネオや加藤完治などがたてた計画である。これは成人者よりも未成年の十六歳から十九歳の若者を徹底教育して、「満蒙開拓青少年義勇隊」と名づけて、ソ満国境近くに入植させることであつた。

## 二 義勇軍志願

私のような農家の次・三男にも、義勇軍として満州に行けば一人当たり二十町歩もの広大な耕地が与えられ、地主として前途洋々たる理想の生活が展望できることは間違いない。そんな調子のよい話を、小学校の教師から聞かされた。

さて私の進路のことだが、同級生の男子のそれぞれが、両親が健在で上の学校に進む者や、長男で家業の農業を継ぐ者など決まっていたが、私は貧しい母子家庭の次男坊で進学など望めず、小学校を卒業したら家を出ることは、子どもながら心に決めていた。そんな時、担任の教師から八幡の城山リョウソウシユクにある凌霄塾で、主に満州のことや義勇軍の話などで合宿訓練があるから行ってみないかと勧められ、とにかく行ってみる気になって応募した。

当時、郡上から一般の人達の開拓団が、吉林省で郡上村開拓団としてある程度の成果を挙げていた。そこへ度々赴いて、現地の状況を見て知っている開拓移民の郡上の推進者だった楠章という人が凌霄塾の講師であつた。

その講師は、郡上村を例に挙げながら、満州は未来に希望が持てる男の行く所だと言葉巧みに扇動された。進路を模索していた私は、遂にその気になってしまった。

あの年（昭和十六年）の初回の募集は一か月前にあつて、郡上から七名で、二回目は、私と弥富村（現大和町）の松永という人と二名だけであつた。

いよいよ義勇軍入隊と決つた時、母は「お前、満州のまりい行くともう帰って来れんかも知れんが、ほんどに行くかや。おくんなら今のうちやぞよ」と、行かせたくない口ぶりで言つた。現在の中学二年生の年齢だから、満州はちよつと遠すぎて、親の目の及ばぬ所に送り出すには不安があつたに違いない。



出発の日は、昭和十六年四月十日であったと記憶している。軍歌にもある

「ここはお国の何百里、離れて遠き満州の…」

子どもが征くというので、村の人達や学校の教師や生徒たちが、まるで出征兵士を送るように、日の丸の小旗を振って送ってくれた。私の出発の挨拶は、学校の教師が作ってくれたものを、家の小座敷で一生懸命練習をして覚えた。日の丸の小旗を持った学校の生徒や村民の前に立ち、村長の送別の言葉を受けた。そして、いよいよ私が挨拶することになったのだが、覚えたつもりを全部を話すことはできなかった。当時、バスなどはないので三里あまりの堀越峠を歩いて、八幡駅まで同級生や近所の人達に送られて行った。一際高い万歳の声に送られて乗車した。しかし、窓を開けて見る友達や教師や近所の人達の顔、聞こえる声、八幡駅の建物すべてが上の空であった。頭の中が真っ白だった。汽車がカーブして、見送りの人達が見えなくなったとき、涙で目が潤んできた。

八幡駅を後にしてから、意外に思うことがあった。越美南線(現、長良川鉄道)の相生から下川までの各駅に、教師に引率された生徒たちが、日の丸の小旗を振って見送ってくれたことであった。岐阜の宿で一泊し、翌日、送ってくれた兄や親戚の者、校長先生と別れる日となった。この兄は、私が満州にいる間に召集され、中国戦線で戦死した。したがってこれが最後の別れだったのであ

る。昭和二十四年十一月、シベリアから帰還する日まで、兄の戦死のことは知らなかった。

### 三 義勇軍訓練所

近親者と別れ、迎えにきた英中隊長ハナダに連れられて茨城県の内原訓練所に入隊。渡満までの二か月半ほど、現地における基礎知識や初歩的な軍事訓練などを受けた。この時が昭和十六年四月。それから昭和二十四年十一月我が家に帰り着くまでの八年七か月は、虱シラミの長い付き合いの始まりでもあった。

義勇軍という呼び名は現地住民に威圧的であるとして、現地訓練所に入ってから、義勇隊といった。日本が常に危惧していたソ連の満州への南下に備えて、血気盛んな青少年男子を四年間徹底的に教育訓練して、ソ満国境付近に配置するのである。そして、平時は農耕に従事し、一旦事あるときは銃を取って国境を死守するということ、半農半軍とでも言うべきものであった。国境付近は気温が低く、半年ほどは寒気との戦いでもあった。農耕による自活で、寒気と粗食に耐えながら、国のためには命を惜しまぬ集団、それが義勇隊開拓団なのである。開拓団の若者達は、申し合わせたように、皆が貧農の次・三男ばかりであった。

私達が三年余り訓練教育された所は、濱江省ビコフシヨウ珠河県シュエキョウ一面坡訓練所大平溝大隊で岐阜県の東濃と飛騨地方出身者ばかりの英中隊で

ある。昭和十六年六月十一日が入隊記念日である。六月ともなる  
と、この大陸は午後八時頃まで明るく、太陽は地平線上で真つ赤  
で光の少ない大きな物体となって静かに沈んでいく。その落日を  
初めて眺めた時は、言い知れぬ感傷で胸が痛み、遠いところに来  
てしまった悔いで涙が頬をぬらしたものだ。これは私だけではな  
く、皆同じ思いだったようである。昔の北海道開拓時代、屯田兵  
達がホームシックになって、故郷の空に向かって泣いたことを屯  
墾病と言ったそうだが、夕日が沈む頃、哀調を帯びた消灯ラッパ  
を聞くと誰しも屯墾病に罹ったものだ。消灯ラッパはゆっくりし  
たテンポで「トンコン病はつらいもの、また寝てなくんだよ」と  
聞こえた。恵那郡出身の赤塚富雄君は、特に上手なラッパ手で、  
彼の哀調を帯びた消灯ラッパは私達少年の胸を締め付けた。

兵舎は小隊単位の草葺きの平屋建てである。中央に土間の通路  
があり、両側に一段上げて一連のアンペラ敷きの寝台と障子紙張  
りの窓がある。窓の下には、作り付けの自習用の机がある。そし  
て十メートル間隔に、レンガ造りのペチカの仕切りがある。電灯  
はなく、石油ランプで暗いので、個人個人が手製のカンテラを作  
って使用した。

教育訓練は、軍事訓練と学科教育で、特に軍事訓練に重点を置  
き、装備は各自に小銃と帯剣、中隊に軽機関銃が二丁位あった様  
に思う。軍事訓練教官は、美濃町出身の長村という人で、中国戦  
線から除隊し、私達の教官として着任した戦地帰りの猛者<sup>モウサ</sup>であっ

た。外に一面坡の駅近くに満鉄独立守備隊があり、私達義勇隊の  
軍事指導部隊になっていた。

学科教育は、精神教育に重点を置いたものであるが、一応教科  
書があつて皇民学・国語・歴史・地理・数学・農業技学・中国語  
などの他、村造りに必要な専門教科があつた。その他には、男ば  
かりの殺伐とした生活に潤いを持たせるために、尺八を専門に教  
える坂本清風という講師がいた。以上の教学訓練を義勇隊青年学  
校と呼び、終戦後であるが、修了した隊員には旧制中学校卒業資  
格が、厚生省より、昭和二十四年一月十四日付けで認定交付され  
た。しかし、そのことが早く各隊員に通知されなかったために、  
就職や社会生活に、有利な扱いを受けることができなかった。学  
科の中で、特に力を入れて叩きこまれたのが、皇民学であつた。  
満州開拓の父とか、開拓義勇軍創立者とか、加藤完治は熱烈な天  
皇制的農本主義者で、「農村の二・三男の身の立て方は、中国大  
陸への移民しかなく、それが日本人の天職である」などと教えた。  
その論理の基本が皇民学であつた。「天皇を戴き、他のどの民族  
よりも優れた我が大和民族が、満州の地に満、漢、蒙、朝、各民  
族の指導者となり、五族協和の王道楽土を建設する」これがスロ  
ーガンであつたが、当時の私達は、他国領土の侵略行為である  
か、植民地政策であるとか知るところではなかった。



#### 四、訓練所生活

教学や訓練生活は、古神道論で鍛<sup>ヨロ</sup>った農本主義者、加藤完治の教えで、多分に神道の宗教的な修行の毎日であった。その一部は次のようであった。

一日は、起床、点呼、朝礼が始まる。朝礼は国旗掲揚（ラッパ吹奏、国の鎮め）整列した隊の前に朝礼台があり、その上に立った幹部教官が、大声で祝詞のような言葉を一節ずつ唱えると、全員が復唱した。

「天晴れ——あな面白——あな楽し——あなさやけ——おけ——」復唱の後、二礼二拍手一押し東方に向かって、天皇——弥栄を三唱（独特な形の万歳）が終わると全員体操のできる間隔を取って、神がかりの意味を持った動きの体操で日本体操といった。その号令というか掛け声で全員大声で、「一二三四五六七八九十百千万」と叫んだ。

朝礼が終わって、一日の訓練の指示があり解散し、小隊ごとに食堂に入り着席すると、小隊長が「御霊——鎮め——」と言い、下腹に手を当てて目を閉じ、小隊長の先導で言葉を復唱する。「食膳感謝の言葉——うるはしゅうして美味き朝食を今受く。乞い願わくは、吾人もろともに心身壮健にして、同じく聖道に進まんとを、食を受けては、まさに真理を心の食とし、噛み碎きては、諸徳の味わいを知らんことを祈る」

「なおれ——」

「いただきます」

これだけの儀式が終わらないと朝食にありつけなかった。

国策で、関東軍の予備隊的な性格を持たせ、成長盛りの少年を、ソ満国境近くに送り出しておきながら、義勇隊の給与は粗末なものだった。少量の米に大豆とか高粱、南瓜などを入れたアラメ（昆布のような海藻）の味噌汁に梅干ぐらいで、肉だの魚はめったに出なかった。南瓜の飯などを毎日食っていると、手の爪や白眼が黄色くなったものである。

給金は一か月三円、一日十銭では、たまに外出しても誇り高い義勇軍でも腹の足しになるものは買えなかった。そんな低い給与でも一銭も使わず年に二回くらい親元に送金していた友もいた。その「拓友」は、加茂郡出身の杉山守夫君であった。その事が、我々四小隊中の評判となり「俺も俺も」という者が増えた。

当時の農村の貧困状態は、育ち盛りの私たち少年の意識の中に入り込み「一円でも良いから親兄弟に送ってやろう」そんな気持ちのなせる所であったと思う。

#### 五 関東軍特殊大演習（関特演）

一面坡訓練所に入隊して一か月足らずの今の年で言えば中学三

年生の夏、関東軍特殊大演習があり、私達中隊にも動員命令がきつた。

昭和十六年七月十四日出発、東安省虎頭の満州第一五〇部隊に配属され、いきなり部隊の野営地の天幕の中に入れられた。先に入っていた兵隊に混じって二ヶ月間露営、飯盒炊爨<sup>ハゴフクスイサン</sup>で、湿地帯に軍用道路を構築し軍用物資の警備などを行った。一番辛かったのは、夜サーチライトを点けて、上陸用舟艇を大勢の人員で肩に担いで、長い道中を運ぶ作業であった。また私達少年は体力が弱く、道の高低差のあるところでは、重量がかかって思わず泣き出すこともあった。野営地には風呂などはなく、湿地帯の道路工事で靴は濡れたままで、泣くにも泣けず過酷な労働をさせられたのである。落伍者も出た。戦場そのものであった。

後で知ったことであるが、関東軍は先のノモンハン事件でソ連軍に大敗したので、ソ連軍の強さを知っていた。北方より南方の資源獲得に戦略を変更し、日ソ中立条約を結んで南方攻略の準備にかかった。日本軍最強の精鋭関東軍を秘密裡に南方に転出させる作戦で、補充部隊を満州に集結する、その入れ替えの混乱状態を関特演と聞いた。この作戦は日本戦争史上特筆すべき作戦であったと聞く。

## 六 村造り作戦

九月になって、関特演動員解除となり一面披訓練所に帰った。これからは本格的な義勇隊の訓練の始まりだった。私達は、三年余りの訓練を終えた後、中隊がそのまま義勇隊開拓団として、いづれかの地に入植し村を作ることになっていて、いろいろな職種に分かれて技能者養成が始められた。たとえば建築関係、農事指導者、教員、畜産、医務班、農産加工、大農機、自動車等々である。私は、経理部に配属された。戦局が厳しくなり昭和十六年十月二月八日の日米開戦の報を、週番の会報で知らされ、大丈夫だろうかと一瞬思った。私は、経理部で本部大隊の方に出張勤務をしていたので、中隊のことは分からないことが多かったが、反抗期の若者ばかりの集団で、加藤完治の説くような修行生活など平穩に永く続くはずもなく、二年、三年と経過すると、かなり荒れてきたようだ。冒険訓練所では、合同運動会で審判に不服を持った隊員が相手の中隊に殴りこみ、それが原因で中隊同志の銃撃戦となった。死者も出て、争いは三日にも及び、軍隊の出動でようやく治まった事件などがあった。

## 七 入植 第四次濃飛義勇隊開拓団

四年間の厳しい訓練を終了した私達東濃西濃郡上飛驒の出身者



で編成された英中隊は、昭和十九年の春、第四次濃飛義勇隊開拓団として北安省徳都県に入植することが決定した。

仮宿舍や仮設道路・生活用水確保など入植準備のため、先遣隊が一月初めに一張羅の防寒服で出発して行った。私達本隊は、四月十五日に一面披訓練所を後にして満鉄の列車で北安駅に着き、そこから歩いて二十八キロ（七里）の入植地に向かった。入植地に着く二キロ位手前に、現地人の部落があった。リハマ部落といつた。そこへ来た時、大勢の現地人が出迎えて部落長らしき人が挨拶された。言葉は分からなかったが、おそらく仲良く頼むというのであったに違いない。それがすむと大層なご馳走をしてもらった。

入植地についた翌日、一望千里の広野を眺め、三年間培った義勇隊開拓魂で理想の村を造るぞと、決意を新たにしたものだ。

先ず最初に団員全員が整列し、先遣隊が建ててくれた濃飛神社（祠）に参拝した。この時心の中で唱えた言葉は、「憂きことの尚この上に積れかし、限りある身の力試さん」であった。山中鹿之助の歌である。自分たちの理想の村を造るために四年間きたえ上げてきた義勇隊魂は「神仏にお助け下さい」と願うのではなく「神仏よ、ご照覧あれ」と誓うことであつた。この時が、私の人生で一番「心気充実」していた時であつたと思う。裏返して言えば、私達貧農の次、三男には、この地より他に暮らせる所はないということでもあつた。

拓殖事業を、大和民族に与えられた聖業であると位置づけた指導者のイデオロギーは、やることなすことすべて神がかつた名を付けていた。先ず仮宿舍であるが、現地には杉や檜のような良質な木材はないため、ドロヤナギの小丸太を地面から拝むように立て、野草で屋根を葺いた。内側は土間に枯れ草を敷き、その上にアンベラを敷いた。とても人間の住むような代物ではなかつた。入り口は、アンベラというコウリヤンの莖で作った筵のようなものをぶら下げた。これを名づけて「天地根元造り」と呼んだ。

一般人の開拓団も、最初は、天地根元造りに入った所もあつたらしい。義勇隊開拓団は、その最たるものであつたらしい。一般人の開拓民も内地では暮らしが立たず財産を処分してきた人が大部分であつた。それゆえ不平など言っておられなかつた。国策という大義名分で飾り、送り出された棄民的な国防植民であつた。

仮宿舍から越冬できる宿舎に移るのに、三か月以上を要した。大急ぎで立てた住宅だが、床暖房のオンドルを作る「日干煉瓦」（土皮子トヒイシ）が乾燥しておらず、凍結して、火を入れたら溶けて煙道の床が落ちてしまった。暖房のない部屋で、どうやって越冬するのか途方にくれた。仕方なく、部屋に干し草を藁のように束ねて敷き詰め、その上にアンベラを敷き防寒服を着て、金物の盥で枯れ草を燃やして交代で寝た。北安の地は満州でも特に寒い。寒暖計の零下四十度の目盛り一杯下がってしまい、その下何度まで下がったのか知ることはできなかった。

風呂場の小屋はあったが、薪がないため、干し草が燃料ではなかなか沸かなかつた。湯気が天井に凍りつき、雪のように裸の体に降りかかった。洗いの床は氷張りで、足の裏が床にくっ付いた。その入浴も月に一回ぐらいであった。このような極限状態の中でも、村作りのための天与の試練と受けとめ、じつと耐えた。

時に戦局は日増しに悪くなり、私達の団の入り口には板切れで「打倒日本」と書いて立ててあったり、現地民の様子が何か今までと異なることを感じた。

二十年二月、一年繰り上げになった徴兵検査を受けることになり、隊員の大部分が同年齢であったので、一同が七里約二十八キロの道を歩いて行って検査を受けた。その日は、物凄いい地吹雪で皆斜めになって黙々と歩いた。検査は勿論合格であった。北満の雪解けは遅く、四月の終りごろであった。

五月、ようやく雪が解けた頃、私達に現役召集令状が来た。私が入る部隊は牡丹江省ムーリンの八〇二部隊第一機関銃中隊と決まった。八〇二部隊の部隊長は柏木求中将であった。有名なノモンハン事件に出撃した関東軍きつての精鋭部隊で、その歩兵の花形の重機関銃中隊である。中隊長は中野重男中尉であった。五月の初めに入隊、出発の時の英団長の挨拶は、我々はこの地に理想の村を創る使命がある。軍隊に入ってもそのことを忘れるな。下士官志願などするな。兵役が終わったら早く帰って来い。そんな訓示だったように覚えている。

私たち団員も、兵役は仕方ないが、出来ることならやがて来る春の雪解け前に農耕の準備をし、この地に永住するための基礎作りをしたい、入植した初めての春であるからやりたいことが一杯あった。しかし、時局はそれを許さず兵役に出発したその時が、夢にまで描いてきた理想の村濃飛義勇隊開拓団との永遠の別れとなってしまうた。

## 八 濃飛義勇隊開拓団の最後

### ― 痛恨の一大事件 昭和二十年八月二十五日 ―

私達兵役入隊者は、再び濃飛義勇隊開拓団に戻ってくることは出来なかつたが、その後開拓団はどうなったか、いつも心にかかつていた。

敗戦後五十年の節目の年、先に帰った同志達の尽力で建てられた私達の団の慰霊碑前で慰霊祭を兼ねた団として最後の総会があると聞き会場の恵那峽に行つた。五十年ぶりに再会できたことを、肩を抱き合い涙を流して喜び合つた。生死を共にした戦友である。私の帰国は、昭和二十二年ナホトカの港まで来て海の凍結を理由にして足止めになり、それから二年間放置された。帰国は、二十四年の暮になってしまった。そのせいで、恵那峽に私たちの団の慰霊碑が建てられていることも毎年八月二十五日に集つて招魂祭が行われていたことも知らなかつた。最後の慰霊祭と総会が私



には最初で最後の参加となった。

その夜は、鬼岩温泉で一泊し夜明け近くまで語り合った。兵役に取られた私達は、一番気にかけていた団の最後を知らない。その晩、団の最後を見届け、その詳細について語ってくれた拓友の思い出話を記しておく。

団に残った者は、兵役適齢前の者十四名と、幹部教師の女家族ばかり四名、新婚一か月で応召した寺町君の夫人と、林君一家の子どもを含めて四人が、団に残った全員ということであった。

日本が負けたとなると、現地民の態度はがらりと変わり、平坦と団員の物を持ち去るようになった。もうここには住めないと思っても、鉄道の通るところまでは七里もある。途中には、完全に敵となった現地人の部落がいくつもあった。婦女や老人の足ではとても逃げられないと覚悟した幹部の夫人達は、どうせ死ぬなら同志団員の手で死なせてほしいと、泣いて懇願された。団員達も困惑したが、満人達が押し寄せて来るのが見えただので、やむなく白装束を着て布団の中で合掌し、念仏を唱えている幹部の夫人達を。断腸の思いで泣きながら銃の引き金を引いたという。その場の様子を根掘り葉掘り聞いていたら、拓友のM君から突然叱られた。「藤村！貴様それ以上聞くな！」M君の目には涙が光っていた。あの時から五十年の月日が流れているが、同志や幹部の教師たちの家族に、手をかけざるを得なかった者たちの胸の中には、拭いきれない悔恨の情が今でも渦巻いているのだ。そのことも知ら

ずに、根掘り葉掘り聞こうとした私が悪かったと、心から詫びるほかなかった。

この時期、私達は敗戦のため部隊行動で捕虜となり、二週間程の間、ソ連兵の監視の下に、どこも知れない所へ連行されて行った。その道中、軍にも見捨てられた開拓団の婦女や老人達から助けを求められたが、私達も囚われの身でどうしてやることも出来なかった。

忘れられない事がある。ソ連兵に連行されて行く道中の事、小学校の六年生位と思われる女の子が「兵隊さん助けてください」と言って我々の隊列に泣きながらついてきた。見ると、背中に二歳くらいの女の子を背負っている。背中の子は、もう泣く声も出ない状態だった。姉と思われる女の子は、片方の足は靴はなく素足で、破れ裂けた踵カカトから血が滲んでいた。勝手な行動は許されぬ私達は、軍衣のポケットに非常食用に入れていた乾パン（ビスケット）を与えるのが精一杯だった。出会ってから二日目に背中の子は死んだ。妹の死体を抱きしめて泣く少女の姿が目には焼き付いて今でも忘れられない。それから一日くらい少女は泣きながらついてきたが、いつのまにかその姿は見えなくなった。おそらく背中の妹を亡くした失意のため、泣きながら行き倒れてしまったのでなからうか。

また、道中で乳飲み子を抱き寄せ、胸を開き骨の見えるほどに腐乱した母子オキゴの死体をいくつも見た。おそらくは空腹に泣き叫ぶ

わが子に、出るはずもない乳首を含ませて息絶えた開拓団の親子の姿であったに違いない。

年老いての思い出は数十年の年月を一足飛びに行ったり戻ったりするので前後の整合性に甚だしく欠けるかと思うが、私達の開拓団の最期を詳しく知ることができることがあった。

平成二十二年一月、八幡の図書館で書棚を見ていたら、たくさんの本のなかの一冊に『集団自決 棄てられた満洲開拓民』（坂本龍彦著）が目にとまった。何気なく手にとり見ていたら本当に驚いた。昭和二十年八月二十五日に私達の開拓団でおきた集団自決の様子が、克明に細大漏らさず書き残してあった。

かつて終戦五十年目の年に恵那峡であった最期の慰霊祭で何にも知らない私はその時の様子を細かく尋ねたら、拓友たちは口ごもって涙を滲ませて云わなかった。逆に激しく叱られたのだった。団の幹部先生のご家族を、私達団員は親とも姉さんとも思い慕っていた。しかし、兵役で御主人の不在中にいくら覚悟の自殺とはいえ、介錯人として銃の引き金をひかざるを得なかった者たちの心情は察するに余りある。

図書館で何気なく通り過ぎようとする私に、死を選んだ拓友たちの魂が「藤村ちよつと待て、この本を見てくれ」と呼びとめたのではないかと思った。偶然と云って片づけるにはあまりにも不思議な本との出会いだった。

噫、希望に胸を膨らませ、青春のすべてをかけた濃飛義勇隊開

拓団は、地獄絵を見るような惨劇の中に消えて行った。

平成二十一年の二月頃の冬のこと、炬燵にあたりながらこの手記を書いていたら、孫娘の芽生メウミがきて、

「おじいちゃん、何書いておるんよ」と、見せて欲しいと言うので、

「これはなあ、おじいちゃんがようど今の芽生の歳に、中国の満州という所に、満蒙開拓義勇軍に行っていたことを思い出しながら書いておるんや」と言ってみせたら、中学卒業記念に学校へ持ってきていきパソコンで打って本みたいにしてみるといので任せた。何冊作ったのか私は知らないが、私の知らない内に一人歩きをして人々の目にふれることになったらしい。

この手記は、私子どもあがりには体験した忘れることの出来ない思い出を自分史のひとこまとして書いてみたもので、決して他人様トモに見てもらおうなど思ってもいなかった。孫の中学校卒業記念の仕事で表に出してしまった。文才のなさを恥じるばかりだ。

義勇軍時代の手記の終りに、「体力と気力が残っておれば、軍隊次代から帰国までの事を書き残そうと思う」と書いていたこともあり、また敗戦七十年目の節目になったこともあり、老骨に鞭打って戦争の史実の一端を書いてみることにした。



## 第二章

### 一 関東軍入隊

思い出は、再び昭和二十年五月までさかのぼる。

軍隊生活は、義勇隊訓練の三年間の経験が生きて、要領も良く苦しいと思つたことはなかつた。六月になつて部隊の軍旗祭があつた時、銃剣術の試合に出て勝ち抜きで十一番の成績をあげた。

初年兵で十一番は抜群だつた。連隊副官から褒められて中隊長が喜んでいたことを現在でも覚えている。

この時期、南方の太平洋戦線は厳しさを増し、あちこちの島の日本軍守備隊の玉砕の報が聞かれるようになっていた。我々関東軍の宿敵ソ連軍の動きにも何か険悪なものを感じていた。

### 二 開戦前夜の既不寝番で

その頃、我々の八〇二部隊の半数以上の兵員の本隊は、牡丹江省の東京城地区で陣地構築を行つていた。その陣地に我々も合流することになった。東京城から一日行軍した所に鏡泊湖という大きな湖があり、さらに奥の山中に陣地があつた。まだソ連軍

と交戦状態ではなかつたが、この陣地の地形地物を生かして敵と  
いかに戦うか、毎日が訓練と陣地の強化工事だつた。そんな陣中  
勤務のひとつのことだつた。重機関銃中隊は軍馬を持つていた  
ので、夜になると軍馬の管理に既不寝番があり、二名づつで二時  
間交代だつた。

ある夜、陣地の下方にある鏡泊湖の水面を震わせる様に鳥と思  
われるきれいな鳴き声がかきこえてきた。じつと耳を澄ましている  
と、それは確かに「ブッポーソー」と聞こえた。あの地に仏法僧  
などいないという人がいるかもしれないが、確かに陣地の闇のな  
かでブッポーソウの鳴き声を聞いて、いしれぬ郷愁を覚えたも  
のだ。

そんな時期、八月の初めだつたか、再び既不寝番に就いていた  
時のこと、今夜もブッポーソウの声が届くと思ひ、夜明け近い  
時間楽しみに聞き耳をたてていた。その時、遠くで砲声のような  
音が聞こえてきた。しばらくして突然非常呼集のラッパで部隊全  
員がたたき起こされた。広場に集められ、将校からソ連軍の進攻  
を伝えられた。とんだブッポーソウの鳴き声だつた……。

### 三 国際情勢

我々下級の一兵卒は日本の勝利を信じて軍務に励んでいたが、  
米英ソの連合国では、勝利を確信して終戦後その戦利をいかに分

け合うかを日本政府も国民も知らないうちに協議していた。二〇年二月の事である。

昭和史のノンフィクション作家、半藤一利氏は、その著書『ソ連が満洲に進攻した夏』でそのことについて詳しく記述している。以下は、自分の体験を元に半藤氏や保阪正康氏の著作を参考に書いてゆきたい。

昭和二十年二月といえば、自分が徴兵検査を受けた時である。当時のソ連領ウクライナの黒海のクリミヤ半島にヤルタというソ連の保養地がある。そこに連合国の三巨頭、アメリカはルーズベルト、イギリスはチャーチル、ソビエトはスターリン、この三巨頭が通訳と若干の随員を連れて集まった。アメリカ大統領ルーズベルトは、病弱のため車椅子で参加した写真があるという。このクリミヤ会谈で、協議され決められた事項をヤルタ協定という。そこでアメリカのルーズベルトの一番の懸案事項と関心事は、いかにして早く日本軍を屈服させるかであった。そのために、ソ連を対日戦に一日も早く参加させようと躍起になっていた。米国の軍部は、日本の満洲に温存する戦力を過大評価していた。このあと二年くらいは、抵抗するだろうと考えていたという。ヤルタ会谈の五日目、二月八日に焦点をソ連の参戦問題に限って話し合いが開かれることになった。この日の会谈に「ソ連の対日参戦は米国の問題」としてチャーチルは欠席している。狡猾な政治家スターリンは、病人のルーズベルト相手で思うように進めることがで

きたと半藤氏は書いておられる。

老獪な政治家スターリンは、ルーズベルトにドイツが降伏した三ヶ月後には対日戦に参戦すると確約し、その条件や代償として「南樺太と千島列島をソ連の領土とする。また、日露戦争で奪われた満洲で築き上げたロシアの権益を取り戻すことが満たされるならば、中立条約を結んでいる日本国との対戦に参戦することは国家利益であると国民に理解させることができる」と言った。

この対日参戦を交換にした、スターリンの条件をルーズベルトは、ほぼ全面的に認めた。スターリンは、この協定を文書化することを要求している。病人で気力のないルーズベルトの頭の中はソ連の対日参戦を一日でも早く実現させようという想いだけではないで、千島列島に日本固有の島が含まれているかどうかなど、どうでもいいことであつたかもしれない。欠席していたイギリスのチャーチルも後から承諾のサインをしている。この時まだアメリカにも原爆開発の目途はついていなかった。ヤルタ協定締結二か月後にルーズベルトは死亡し、トルーマンが大統領になった。このヤルタ協定は、後のポツダム宣言の原案という。

日本は敵国であつたとはいえ、その領土や権益を勝手に米ソの取引の道具に使われていた。しかも情けないことに当時の日本は、ヤルタの密約など全く知らなかったのである。さらに、啞然とすることを半藤氏も保阪氏も書いている。二十年六月頃から宿敵ソ連を仲介に頼んで終戦工作に日本の軍部も政府も懸命に動き出し



たことである。日露戦争、シベリア出兵、張鼓峰事件、関特演、ノモンハン事件等々自分たちが知っているだけでもただの一度も友好関係を持ったことのないソ連を仲介に頼んで有利に終戦を迎えようと画策していたこと、そのためには何を提供してもよいと、また賠償として在満州の軍人等を労働力として提供することに同意すると日本側から言いだしている。これ以上書く気になれないほど敗戦時の日本の軍や政府は混乱していた。史実を知らなければ知るほど調べれば調べるほど歴史の闇は深まるばかりだ。

ルーズベルト死去の後にアメリカ大統領になったトルーマンは大のソ連嫌いである。ソ連を頼らなくても勝てるかと確信する事件があった。七月十六日原爆実験の成功である。この時期から米ソの激しい冷戦のかけひきが始まった。当時の国際情勢について長くなってしまったが、ひとまず筆をおくことにする。

#### 四 参戦

思い出は後戻りし、シベリアに抑留された時のことを思い起す。

二十年五月八日にドイツは無条件降伏した。国際情勢など考えたことのない自分たちは、その五月に関東軍に入隊した。それは、ソ連と米国の激しい冷戦の渦中に投げ込まれ翻弄された思い出しなくともない苦難の始まりであった。

二十年八月初め、突如ソ連軍はソ満国境を越え侵攻してきた。

日ソ中立条約を破つてである。二月、米・英・ソの首脳がクリミヤ半島のヤルタで会談し協定した中にドイツが降伏したら三ヶ月後にソ連は、満州の日本軍攻撃に参戦すると約束している。その協定を日本の軍も政府も知らなかったというが、ドイツは五月八日に無条件降伏している。ソ連はヤルタ協定の米英との約束を守つたということなのだろうか・・・

八月三日、我々の部隊にも出動命令が出た。持てるだけの食糧と弾薬を持ち、完全武装をして鏡泊湖の山中陣地の山を下り、ソ連軍の侵入して来るであろう場所に布陣した。我々の部隊は、精鋭といわれる兵士はその持つ武器といっしょに南方戦線に引き抜かれて、実戦の経験のない兵と武器も不十分でお粗末な部隊だったが、士気だけは高かった。

翌日の八月四日、ソ連軍が侵攻してきた。大量の戦車とトラックに分乗したソ連兵が見えたが、自分たちの射程距離より遠い。見ていると戦車砲と自走砲によるものすごい砲撃をしてきた。その間は二時間ほどだった様に覚えている。それだけの砲撃を加えただけで敵は先を急ぐように満州の中心地方面に向かって侵攻していった。部隊としては、火力に勝る敵と交戦するには、平原より山の陣地の方が有利と判断した。少なからぬ損害を被つて、また山の陣地に引き返した。主要道路を占領された我々の部隊は、山中の陣地で完全に孤立した。

## 五 敗戦 シベリア抑留

再び鏡泊湖の陣地に戻り、敵の戦力を知った我々は「二度と敗けん、今度こそ関東軍の力を見せてくれる」と接近戦で戦うべく満を持していたが、八月二十日頃、ソ連軍の砲撃音もしなくなり、何かおかしいと思っていた。そんな時、週番将校より通達があり、部隊長命令で「天皇陛下の命により本日ただ今より除隊を命ず」と伝達された。個人行動で部隊を去る者には、必要量の食糧が支給され、部隊行動する者はソ連軍の支配下に入るようになった。部隊中が大混乱になった。自分は行くあてもなく部隊行動しかなかった。直接ソ連軍との戦いに敗れて捕虜になったのではなく、命令によって戦を止めたので、ソ連軍の支配下に入るには大変な抵抗があった。そうした不満から個人的にソ連兵と争って無駄に命を捨てた兵が少なからずあった。

それから十日程、自動小銃を持ったソ連兵に連行されてランコウの飛行場へ着き、そこで武装解除された。ソ連というよりスターリンは当初の北海道に上陸し占領する方針をあきらめ、満洲の関東軍を戦時賠償としてシベリア開発の労働に使うべく、一千人単位の大隊に編成してシベリアの未開発地に抑留するように命じた。自分たちの大隊長は佐々木大尉だった。

食糧は二か月分は持参するよう指示されていたと聞いた。一週

間ほど貨車に詰め込まれて運ばれ降ろされた所は、駅舎も何もない田舎の駅で、九月半ばの夕方だった。貨車から食糧を降ろしていたら、ソ連の現地人たちが奪いに来た。婦人たちが多かったが、ソ連兵の監視があるので止めることが出来なかった。なりふり構わぬ様をみて彼らは飢えていると思った。後から知ったことであるが、ソ連はヨーロッパ戦線でドイツに侵攻され、穀倉地帯のウクライナなど四年間も占領されたため、農業生産力の低いシベリアから食糧や生活用品を送ったという。後になってソ連の地方人が、「それでも我々の国は勝った」と反り返って胸を叩いて力んでみせた。

我々の収容先は駅から十八キロ行った山の中と言われ、原生林のけもの道を歩き行き着いた所に、五百人収容できるという巨大なテントが張ってあった。季節は九月中旬で、シベリアの冬は早く訪れる。寒さがきびしいため先ず越冬できる宿舎作りから始まった。ここの地名を思い出せないが、オブルチエと言っていたように思う。戦争前にここの山に錫スズの鉱山が発見されたが、戦争の為に開発されずにいたものを、ソ連は我々日本人捕虜を使って開発することにした。錫の鉱脈は、アフリカに多くシベリアで発見されたのは珍しいとのことだった。この地は広い盆地でカラマツの原生林であった。錫鉱山の開発を計画し、カラマツの根元から一メートルくらいの所にボルトで穴が開けられ、薬剤を注入して枯れさせてあった。



鉦山開発の町づくりのために各人の職業を聞かれ、職種別に二、三十名くらいの班を作って労働させられた。自分たちのような特に技能を持たない者は土方の組だった。鉦山で大量の水を使うため、水道工事で水道管を埋設する穴掘り工事だった。

今、思い出してみるに、シベリアの寒さは水道管の埋設するための穴というか溝を掘るのに道具はスコップとツルハシだけで、土地は二メートルの深さまでカチカチに凍結していた。その為に、水道管は凍結しない深さまで掘った溝に設置しなければならぬので、先ず午前中は薪を集めて溝の位置に火を焚き土を融かしてから掘った。半日も大きな火を焚いても熱は下に向かわないので深さ三十センチくらいしか掘れなかった。そんな重労働の毎日だった。

作業の休憩のときのことである。一人の地方人が近づいてきて、ロシア語など全然わからない自分たちに「ギシ」「ギシ」という。何を言っているのかわからずにいると「サムライ」といった手振りをつけて今度は「ハラキリ」と言った。それで自分たちはようやく気づいて「この者は四十七士の事を知っているらしいぞ」と言って笑った。

しかし、今この手記を書いていて、(あのロシア人の男は、義士のことをもの知り顔で自慢して言っただけのことだろうか、はたまた戦に敗れて捕虜にまでなった「サムライ」が「ハラキリ」を忘れたか、そんな意味で言ったことではなからうか)と思ったが、

それは少々勘ぐりすぎかもしれないがどうだろう。

## 六 脱走事件 (脱走とは、軍隊用語で逃亡のこと)

シベリアの厳冬は、あの大河アムール河でさえも十一月末には凍結させ、その上を荷物を積んだトラックが走る。満洲の地と陸続きの状態になる。この河の凍結を待っていた様にして「ラーゲリ」(収容所)からの脱走者が出てきた。自分たちの班からも一人脱走者が出た。

記憶が定かではないが長野県の人だったように聞いていた。名前はKさんと言っていたように思う。Kさんは、四十歳近い年齢の人で軍隊では老兵の方だったが、長野県で編成された開拓団の人だった。自分たちが降ろされた駅は確かオブルチェといったが、オブルチェ対岸の満洲で国境から三十キロほど離れた地区に五年前に入植した開拓団員だった。家には、妻と子ども二人それに年老いた母親がいた。異国の地で自分がいなければ家族は生きていくことはできない。一日も早く家族のもとに帰ってやりたい、それができるのは黒龍江が凍結した今がチャンスである。今なら歩いて家族のもとに行けるとKさんは自分たち仲間と悶々とした心情を打ち明けた。

Kさんの決死の覚悟を聞いた自分たちは、「失敗すればそれこそ生きて家族のもとに帰れんぞ」といって止めたが、Kさんの決心

は変わらなかった。そのうちに自分たちも協力しようということになり極秘のうちに計画を練った。共謀者は五、六人だったがそのうちの一人に自分も入っていた。発覚すれば重い刑に処せられることはわかっていたが、先ず十日分の食糧を用意する事になり自分たちの食事のなかからパンなど削って貯めた。ただでさえ不十分な食事からけずるということは、至難のことだった。それができたのは、Kさんが人から模範とされ、同情を寄せられる人柄だったのだと思う。

Kさんは森林伐採班だったので、山に入り逃げる隙があったのだろう。計画してから半月ほどたった日、Kさんは脱走した。戦友たちの理解と協力によって決行された脱走事件だったが、成功したかどうかは遂にわからなかった。このほかに二件ばかり脱走事件があったが、二件とも発見されて連れ戻されていた。Kさんの場合は、敗戦から一年を経過している。開拓団はおそらく元の現地にはなくなっていたと思われる。しかし、自分たちにそのような状況は一切知ることではできなかった。この脱走計画に共感して加わった一人として、ただただ成功を祈るばかりであった。

伐採の現場では、作業を終って帰りの点呼時に一人足りないことが判り、事故か脱走かで大騒ぎになった。それからが大変だった。ラーゲリに帰ってから、ソ連側はラーゲリの全員を広場に集めて点呼を始めた。一か所に集めた者を一人一人名前を呼び十メートルばかり離れた場所に五列縦隊に並べさせた。作業から疲れて

帰った夕食前だった。その点呼にはたつぷり二時間かかった。

シベリアや満州などの地方は、夏は四時前に陽が昇り、夕方は十時近くまで明るい。冬は、朝八時でもうす暗く、夕方は四時には暗くなる。Kさんの脱走は大河アムール河の凍結した冬であったから、疲れと空腹ときびしい寒さで全員うなり声をあげた。零下二〇度を下回っていたと思う。Kさんの脱走の一部始終を知り協力した自分たちにしても、この辛さは骨身にこたえた。

## 七 階級章を投棄

ソ連のスターリンの指示で、我々日本兵の捕虜は千人単位の大隊に編成されてシベリア各地の開発に送り込まれた。その管理や統率はソ連側は直接手を出さず、日本軍側に任せた。当時の日本軍は、天皇の軍隊であり天皇の權威は絶対的であった。軍人勅諭には「上官の命令は即ち朕の命令と心得よ」とうたわれ、少しでも上官の命令に背けば「重営倉」の刑に処せられた。その体制をソ連側は巧みに利用した様に思われる。

シベリア開発の仕事は色々な職種の班に分けられた。一組の班は二十人くらいで、班長は日本の下士官で、ソ連側はその班長に作業指示をした。下士官は指揮をするだけで、作業をする者は下級の兵隊ばかりで栄養失調の身体には想像以上にこたえた。シベリアで倒れていった兵士のほとんどは、老年兵と下級兵士だった。



ソ連には、「ノルマ」という独特の作業量評価基準があつて「ノルマ」の一〇〇%以上の仕事をした者には、多少の褒美があつた。それは各收容所毎で、他のラーゲリでのごとはわからないが、我々のラーゲリでは、ノルマの評価は個人ではなく作業班単位であつた。班のなかに働きの悪い者がいると、班の成績が上がらず褒美にありつけないため、班長や下士官はその者につらく当たつた。実際には、ご褒美に下されたパンや菓子を上級者の口に入つてしまつていたのだが……。

二十一年の夏頃から、自分たち一兵卒はもう日本には軍隊はないのだからいつまでも日本の軍規で縛られては生きて祖国に帰ることが出来なくなると考え、だんだん上級者のいうことをきかなくなつた。

上級者たちは、自分たちの権威を守るために下級者に対して今まで以上に激しい暴力をふるつてきた。その最たる例がある。

## 八 アカツキ 暁に祈る

モンゴルの首都ウランバートルのラーゲリで、その大隊長であつた吉村中尉は、命令絶対服従の軍規の乱れに危惧を感じてか、自分の隊長としての権威を守るためにか、日頃不平不満をいう二人の兵士を下着だけの姿にして激しいリンチを加えたうえ、空屋の柱に後手に縛り猿ぐつわをかませて朝まで放置した。吉村に同

調する下士官たちも手伝つたという。死の苦痛に堪えかねての唸り声は夜半まで聞こえていたという。朝になり戦友が行つて見ると、朝日を拝むように頭を垂れて凍死してゐた。戦友の悶死の姿を見た誰かが「暁に祈る」といつて友の名を絶叫し号泣したという。この「暁に祈る」事件は、復員後裁判にかけられたと聞いたがさてどうなつたのであろうか。

思ひ出を自分たちのラーゲリに戻すと、二十一年の夏の初め頃まで軍服の上着の襟に階級章を付けていた。私の階級は陸軍二等兵で赤地に星がたつた一つだつた。軍隊がなくなつたから、いくら努力して頑張つてみても星が一つになることは絶対にならない。捕虜という汚名の上に星一つ。これこそ屈辱の紋章である。

自分たち義勇軍出身の若年兵が、真先に襟章を引きちぎつて捨てた。それからは、階級章を見ての差別はできなくなり、一応身分としては対等になり下級者に対する「いじめ」の様なことは少なくなつたが、皆無とは云えなかつた。

## 九 入院

二十一年の夏の初め頃、我々の收容所でこの地方の風土病と云われていた赤痢が発生した。アミーバー赤痢といつて、自分も感染してしまつた。粗悪な食糧事情でやせ細つた体に激しい下痢で危篤状態にまでなつた。同じような重症者四名をビロビジャンと

いう都市の病院に入院させてくれた。日本人ばかりの患者の大部屋に入り、療養生活一か月でどうにか元氣になって退院した。入院前の土方の組でなく、建築班の左官の組に入れられた。壁塗り工事は土方とちがつて冬期は屋内工事だから病気がり自分の分には有難かった。当局にもそんな配慮があったのでなからうか。自分には左官の技術などないから職人の手伝いをしながら一生懸命に壁塗りの技術を習った。

余談だが、それがきっかけで帰国してから曲がりなりにも左官職人になった。昭和三十八年五月九日には左官部門の職業訓練指導員の免許を取得することができた。

この錫鉱山の開発はソ連の五カ年計画の重要なプロジェクトとして進められ、二カ年ほどで錫鉱山を中心の町の様になった。人口も多くなり、その労働者の住宅も多く建てられた。鉄道の駅から十八キロ、巾十メートルの広い道路もパン工場も小さな学校も水道もみんな日本人の手で作り上げた。カラマツの原生林だった荒野が、忽然と鉱山を中心の工業団地に変った。この日本人の労働の成果を見ていた地方人は、我々日本人に好意的だった。

## 十 帰国通知

昭和二十二年の十月初めだったと思うが、鉱山開発に日本人の労働力が必要でなくなったためか突如帰国命令が出た。帰国命令

の伝達は、全員を広場に集め、ソ連軍の将校と捕虜になってからロシア語を勉強した通訳の大橋君の二人で伝えられた。全く予告なしの突然の帰国の通告だった。それに収容所のソ連側の所長ソ連軍の中佐（マヨール）の振舞は、異国の風習を知らない私達には初めてみる感情の表現であった。日本側の隊長の佐々木大尉の肩を頼りまでして、今までの労苦をねぎらい、帰国を祝う言葉述べたのだった。全員、飛び上がって喜んだ。思わず知らずうれし涙が頬をつたった。忘れることのできない感涙のセレモニーだった。二年あまりの抑留中に無念の死を遂げた戦友の埋葬地の土饅頭ドマシユウに合掌し別れを告げた。

帰国の通知から三日目の朝、我々のつくった鉱山の町を後にした。作業中に知り合った現地人や婦人たちが大勢出て送ってくれた。ソ連は多民族国家であるため、異民族に対する偏見はそれほど強くなく、心から別れを惜しんでくれたように思う。一週間くらい列車で運ばれて、夢にまでみたナホトカの港に着いた。二十二年十月初めの朝だった。

ナホトカの港は見渡す限りの広い砂浜で、少しばかりの建物があるだけの淋しい港だった。列車から降りてみたら、あの広い砂浜いっぱいにはテントが張ってあり、先着の部隊が乗船の順番待ちをしてもう一週間になると言っていた。日本からの船は一日おきに一船だけと言っていた。しかも、一船に乗船できる人員は二十人に限られていた。



しばらくして通達があり、乗船の順番がくるまで別の地区で待機せよとのことだった。どれほど歩いたか、遠くに港や船の見える丘の上に兵舎か何かわからないが、我々の千人ほどの部隊を収容できる施設（おそらく囚人の収容所の跡と思われる）があった。そこに乗船の順番がくるまでという理由で収容された。一日おきに出航して行く帰還船を見ながらしばらく待機していたある日、通達があった。自分たちの部隊の順番がくるころには港が凍結するから帰国は来春になると聞いた。またしても期待は裏切られた。こんなことならナホトカの港まで来ないほうが良かった。

## 十一 再び収容所で二年半

帰還船を目の前に見ながらの越冬は耐え難い苦痛の毎日であった。日本にはたった一隻しか船はないのか！南方からの引揚げはほぼ終わったと聞いていたのに。憤懣やるかたない怒りは今でも忘れていない。越冬することに決まったら、ソ連側は我々に労働をするよう要求してきた。主にナホトカの港の拡張工事だった。自分は、近くにあった火力発電所の雑役をやらされた。

春になったら帰国できるだろうと思っていたが、港の水が解け帰国船の出入りが見えるようになって何の音沙汰もなく月日が過ぎた。シベリアの鉾山開発に二年余り。ナホトカの港に着いてから、運良く乗船して帰る同僚たちの帰国船を遠くから見送って

悶々として過ごした月日がまた二年半。ようやく帰国船に乗ることができたのが、二十四年十月二十日頃だった。

昭和十六年四月、十五歳で満蒙開拓青少年義勇軍として家を出てから、実に八年七カ月、命令の赴くままに盲目的に動かされてきた。米ソの冷戦の狭間でクタクタになるまで翻弄されてきた。

もうこんな戦争はやってはいかん  
もうこんな戦争は許してはいかん

今では数少なくなった戦場の体験者として先の大戦の史実をより深く探求してゆきたいと思う。作り話や想像話でなく実戦の体験者の義務として真実を語り残したいと思う。

## 十二 舞鶴の港に上陸

シベリアに抑留されて四年三か月、死地を脱して帰国する事になり、昭和二十四年十月二十七日、夢にまで見た日本の舞鶴港に上陸することができた。

今思い出すに、シベリア当時、特に気が合い仲良くした戦友に北海道出身の小谷君がいた。小谷君の祖父は岐阜県出身で、昔北海道開拓移民であったと言っていた。身の上話を繰り返すうち、ある日小谷君が、「藤村は帰ったらどうして暮らす？」という話になり、そこまで考えてなかったのだ、答えに詰まった。自分には家に兄があり、そのために次男坊の自分は義勇軍で満州に渡っ

た。その話は深刻な問題である。話を聞いていた小谷君は、「藤村、俺と一緒に北海道に行かんか。俺の家は牧場をやっているの  
で、人手はいくらあっても良いから」と言う。こんなみずぼらしい姿で古里の人たちの前に立ちたくない、そんな気持ちも強くあった。兄弟以上の仲の親友小谷君の誘いにのって、このまま北海道に渡る話に決めていた。

上陸して宿舎に入り落ち着いた頃、各人に便りが来ているという案内があった。廊下に出てみると、イロハ順に小箱に入れた手紙が並べてあった。自分のものを探し出したら、兄弟や身内、友達  
の便りが沢山来ていた。その中の一通、妹からのものに「兄さんが中支で戦死したから早く帰ってくれ」と書いてあった。思ってもい  
なかつた兄の戦死の報に呆然自失した。「こりゃ大変だ」と、すぐに小谷君に妹の手紙を見もらい、北海道行きは断念し、と  
りあえず家に帰ることとなった。

シベリアに抑留されたあくる年の二十一年と覚えているが、日本に便りを出せる様になり、専用のハガキが各人に交付された。検閲があるからカタカナで書くようにいわれ、消息だけ書いて出した。二か月ほどの期間をあけて三回出した。そのうち二通は今でも大切に保管している。

シベリアからの便りは全部届いているのに、日本からは一通も届いていない。全部舞鶴の引揚事務所の廊下の箱に放り込んであった。そのため、昭和十九年に中支で戦死した兄貴のことを、二

十四年の暮れまで知らなかった。

慌ただしい帰国手続きの最中、順次呼び出しがあったので行く  
と、一つの部屋に机を置いて、アメリカの将校一人と四人の日本人が椅子に座っていた。自分が椅子にかけると、いきなり何も言  
わずにカメラで写した。別の男が自分の手をとって、何の説明もなく指紋をとった。突然の事で、何をされたのか判らん内に、何か尋問された様に思う。

俺達は何か罪を犯したのか、夢にまでみた祖国の土を踏んだその途端に、この様な犯人扱いはなんなのか。アメリカが敵視する  
国ソビエト・ロシアを見てきた者達だからか。言ひ様の無い屈辱感に身が震えた。

保坂氏はそのことについて以下のように書いている。

アメリカは、シベリア抑留者を通してスターリンが日本に革命を起こそうとしていると判断し、舞鶴に戻ってきた帰国者ひとりひとりに対してその氏名・関東軍での所属・どの收容所にいたか・指導者はどういう人物であったかなどを克明に聞き取りをし、その内容をもとに共産主義者の人脈図をつくりあげた。

昭和二十五年のレッドパージなどは、こうした調査にもとづいたともいわれている。この資料はその後、日本にもわたされ戦後新たに発足した公安調査庁はこれをもとに日本中で監視を続けた。日本での社会革命を意図したソ連とそれを抑えようとするアメリカとの対立であったという。



昭和十六年といえ、今から七十余年前の事になる。私の十五歳の時で、太平洋戦争の勃発した年である。その年に私は、満蒙開拓義勇軍に応募して入隊し渡満した。義勇軍で満州に行けば、二十町歩の耕地がもらえて大地主で裕福な生活ができると教えられ、貧農の次男坊の私は、正直なところそれに魅かれて行く気になった。そのことが他国への侵略的植民行為であることなど知るどころではなかった。また、知ってはならない国策だった。

引き続き二十年には根こそぎ動員で関東軍に徴集され、二十年八月にはソ連軍との対戦で敗北し、筆舌に尽くしがたい苦難のどん底に突き落とされた。それは、四年三ヶ月の捕虜としてのシベリア抑留だった。

満蒙開拓団とは何だったのか。忠義を最高の美德とし、ひたすら滅私奉公を強いた巨大な軍国のくびきを逃れ出てから、二十四年十一月に帰還するまで実に八年七ヶ月。私の人生で一番大切なかけがえのない青春は、北国の荒野にむなしく消え失せてしまった。

## あとがき

平成二十二年に、孫娘が中学校の卒業記念に言うて、私の七十年前の思い出の手記を編集して読後の感想をこんな様に書いている。

「この自伝は、私の祖父が私と同じ年の十五歳の時、第二次世界大戦に参加した体験をつづったものです。私がこのことを知った時、いつも頑固で山を走りまわっている祖父にこんな過去があったのかと驚きました。思えば、今の祖父は十五歳からの青春時代を取りもどすかのように友達と遊んだり、好きなことをしているのだと思います。教科書や小説、ドラマでしか見たことのない私が、戦争体験者の祖父から生（ナマ）の声を身近で聞けることは、とても幸せなことです。そして祖父の体験したことは、二度と起きてはいけないことだと知ることもできました。祖父がいなければきっと今の私はいないだろうとつくづく感じます。いつも頑固。でも、やさしい祖父をこれからも大切にしたいと思います」

西和良中学校 卒業記念 藤村 芽生

まだ十五歳の子どもで、まとまったことなど何にも出来んと思っていたのに、最後に「祖父の体験したことは、二度と起きては

いけない事と知ることできました」と書いている。それだけわかってくれればうれしい。高齢になってもものを書くということは大変なことであったが、今は書いてよかったと思う。

この拙文の編集に、郡上郷土史研究会の編集の方々には貴重な御示唆をいただき深謝します。

二〇一五年（平成二十七年）四月

藤村治一 八十九歳

#### 参考資料

半藤一利『ソ連が満洲に侵攻した夏』文芸春秋、一九九九年

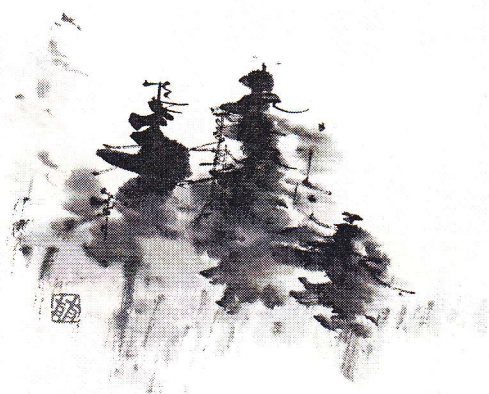
保阪正康『昭和史七つの謎』講談社、二〇〇三年

坂本龍彦『集団自決 棄てられた満洲開拓民』

岩波書店、二〇〇〇年

山口節夫『義勇隊ラッパ鼓隊』プロアート、一九九三年

斎藤六郎『シベリアの挽歌』終戦史料館出版部、一九九五年





## 幕末期郡上の災害

白石 博 男

### はじめに

郡上の災害史を調べまとめることは、筆者の以前からの課題であったが、全時代を調べることは、今となつては筆者にとつて対象が広すぎるので、とりあえず、順不同ながら、時代を限つて調べてみることにしている。

これまで本誌において、「天保の飢饉と郡上」・「文化文政年間郡上の災害」と一応書いてきたので、今回は幕末期における郡上の災害について調べてみたい。

災害史は、過去の悲惨な歴史であるのみではなく、関東大震災・伊勢湾台風・阪神大震災・東日本大震災・御嶽山噴火等を思い起こすまでもなく、歴史的諸事件の中でも、現代においても極めて重大なものであることは、今更言うまでもあるまい。数少ない史料の中から、郡上災害史の一端を跡づけてみたい。

天保期の終わった弘化元年（一八四四）から江戸時代の終わる慶応年間（一八六五～六八）までの二〇数年間が対象である。

この時期の郡上の災害についての史料は、今まで取り上げた

時期に比べて少なく、今まで以上に「万留帳」（『大和村史料編』、妙見神社神主粟飯原豊後正の留書）中心となった。それ以外の史料は、この時期については、残念ながら非常に少ないが、実際は災害は多かったものと思われる。以下、史料名を註記するもの以外の史料は、全て「万留帳」であり、引用毎の註記は省略する。

### 弘化年間（一八四四～四八）

このころ蚕飼の不作の記事が多い。

この時期の最初の年である弘化元年（一八四四）は、一二月一日改元までは天保一五年であった。この年には、

「蚕飼甚だ以て不作の年なり。郡中ならして四分五分に及び難き由なり。糸まゆ金壺両に付き式貫五百より八、九百迄、去年位と申しながら少々下直の年也。是は去年糸追々下直に相成り、商人甚だ迷惑いたし候ゆへなり」

とあり、次の弘化二年にも、

「蚕甚だ以て不作の年なり。去年よりもとり三、四分と相見え候」

とある。この年には、

「弘化二年上保川沿い郡上郡川辺村・神路村にて敷地数町歩流亡す」（『岐阜県災異誌』）

という水害があった。

さらに二年後の弘化四年（一八四七）にも、

「五月下旬甚だ以て雨天にて困り入り候、蚕飼一統不作、近辺ならして五分にも及び難き位也。桑不咲、半分しか御座無く候

……就中桑に虫多く付き候様に見え申し候」

とある。

同年十一月、畑佐村（明宝）で火災があり、このとき帳方を務めた庄次郎隱居庄右衛門により、出火の時のいきさつが子細に記録されている。

「十一月十四日午後五時ごろ、東つまのひさしでふろを焚いたら、風が吹いてひさしが燃えあがり、すぐ大屋根につき、手のほどこしようもなく、大騒ぎとなり、村内はもとより他村からも駆けつけて消してください。おかげで私一軒で類焼もなくまず安心した。もともと仏様も馬も無事で、その折、妹が病んでいたので、家内中が病人にかかっており、家財などは残らず焼失した。

鎮火してから、組頭徳左衛門殿が町方へ届けてくださり、翌十五日に御役人直井平兵衛様・書屋加治屋藤助殿がお越しくださって、通りがかりにすぐ見分を済まされ、十五日夜、私どもを呼び出しいろいろお尋ねがあった。

この時、礼として、直井平兵衛様と代官手代のお二人に、それぞれ天具上二帖ずつ、書屋には金二朱を贈った。その後、飯米も年貢用のかこい米も焼失したというので、組頭徳左衛門殿

がお上へ願ってくださり、年貢米ご用捨の上、お米八斗を下しおかれた。そのお礼として、両代官へ上たばこ一丸ずつ、庄屋・組頭へ天具上二帖ずつ、百姓代にはたばこ一把を贈った」

〔明宝村史通史編上巻〕「出火之節御見舞覚帳」

### 嘉永年間（一八四八〜五四）

嘉永三年（一八五〇）は凶作の年であった。

七月から雨天が続き、八月も天候不順であり困った。八月八日に大雨・大水があり、「和良・津保殊の外洪水、木曾川大水のよし、水損多くこれ有るよし」であった。

この年は、郡中ならして五分余の凶作で、どの作物もよいものはなかった。中でも下川筋は甚だ凶作で、上保筋は少しはよかつたとはいえ、牧村・西保村は甚だ悪作であった。木曾川・津保川は大水で、岐阜から名古屋屋辺は甚だ凶作だった。牧村辺は、天保七年以上の悪作だったが、「一統の気分存外穩か」であった。

この凶作による「一統難澁の時節」に対応して、郡上藩から庄屋を通じてお触れが回った。

「凶作に付き、来春互いに取遣いの節並びに吸物の振舞いの義は一か年休みにいたし申すべき由それぞれ咄し合ひ、庄屋より



定使を以て触れ申し候也」

翌嘉永四年も病氣と悪作の年であった。

「二月中旬より風邪流行し、どの家も三、四人ずつ病氣になった。おおむね軽いもの一日、重いものは五、六日寝ていた。世間ではこれを『琉球人風』と呼んだ。去年琉球人が来朝し、それより流行したということであった」

七月一三日には大雨が降り、「川々洪水、道橋損し、当村も棚井・田畑井二か所ぬけ申し候也」

この年、牧村から徳永村・剣村・白鳥村にかけて、稲にまくりという虫が付き、凶作であった。

翌嘉永五年三月、牧村で火災があり、この時の近村からの駆け付け・応援の状況が詳細に記録されている。

「三月十日未刻（午後二時）、牧村木蛇寺垣津の遠藤仁右衛門家から出火し、並びの新平家に類焼、さらに裏の山両方に火が広がり、七ツ（午後四時）過迄山焼けがひどくなり、鎮火しないので、各地から前代未聞の応援があった。

五町村より神路三か村、場皿より万場迄、中津屋並びに小間見・大間見両村など、全部で二、三十か村が駆け付けた。御改役人松島利右衛門・関谷市左衛門、筆工鍛冶屋町角屋藤助が、十一日昼頃到着し、組頭弥右衛門方で昼食後、直ちに火事場を檢視し、庄屋方へ引き揚げ、翌十二日巳刻（午前十時）に引き揚げた。

この火事のと、遠藤仁右衛門隠居（八十七歳）は老衰のため、ようやく火事場から抱え出し、定右衛門方へかくまい置いたが、十一日昼八ツ時（午後二時）頃死去したので、同十二日に定右衛門方で取り置きした」

さらに同年六月二九日夜半には、剣村でも火災があり、剣村庄九郎から出火し、並びの浄円寺が類焼した。如來は搬出したが、ほかは丸焼となった。但し土蔵は残った。

この嘉永五年（一八五二）には、月日は不明であるが、上保川筋で水害があった。

「上之保川出水。郡上郡歩岐島村・越佐村にて堤破れ、耕地被害多し」（『岐阜県災異誌』）

嘉永六年六月、切立村で落雷による火災があった。

「六月二十四日昼八ツ時（午後二時）頃厳しい夕立雨があり、切立村で甚六という家が雷火で焼失した。この時近在は雷鳴がひどく、切立村ではほかにも三か所落雷し、その他の村々でも落雷が八か所とも十か所とも風聞はまちまちであった」

この嘉永六年六月には、大地震があった。  
「六月十五日暁八ツ（午前二時）過七ツ時（午前四時）頃大地震、同明六ツ時（午前六時）又朝五ツ時（午前八時）頃にも常並の地震有り、此地震伊賀上野・伊勢四日市・和泉・堺・京近郷等大震、堺壱番とも、或いは又伊賀上野壱番ともまちまちの噂有り、四日市などは六百軒程ゆりくずし、直ちに大火事と成

り。西国大名（拾万石とか）御朱印改めに御出府の御方宿り合  
い、御朱印も御付々の人々も行衛相知れ申さずなどと申す咄有  
り」

さらに同年一月にも大地震が相次いで起こった。

「十一月四日巳上刻（午前十時）大地震有り、それより同十日  
頃迄昼夜四、五度づつ地震有り不穩候也。此地震伊勢古市大變、  
江州彦根城下にて死人三人、怪我人百人程、つぶれ家百軒程と  
申す噂有り、尾州宮宿、ちりふ宿大變と申す噂有り」

「十一月中旬壺日置、又は二日目頃に地震有り、不穩候也。そ  
れに付き大坂にては当六月地震の節船に居り候者別条なきによ  
り、その勝手にて此度多く船へ乗込み用心いたし居り候所、大  
浪にて大船を押し寄せ、小船は敷きこまれ、人死数知れずと申す  
噂有り」

### 安政年間（一八五四〜六〇）

安政二年（一八五五）は、日本地震史上に名高い江戸大地震の  
年である。「万留帳」には、この年の地震についていくつかの記  
事がある。

「正中中、小地震四、五度もあり。二月朔日未の下刻（午後三  
時）大地震有り、去冬中の内二ツ、是と三ツの大地震なり。尤  
も三ツの内今度は小さし、今度飛州白川にて山抜け、家そんじ、

人死等これ有る噂もあり、その外同十四日、同廿五日等二月中  
に三、四度も地震有り」

「四月八日夜五ツ（午後八時）過ぎ地震あり、存外大きなり、  
尤も三月十六日昼九ツ時（正午）頃、同十五日六ツ時（六時）  
頃も地震あり、始終地震沢山なる年なり」

「九月十四日夜四ツ時（午後十時）大地震有り、尤も何方にて  
も格別のくずれ等噂承り申さず候、同夜八ツ時（午前二時）地  
震有り中、同十五日朝五ツ時（午前八時）地震小、同夜七ツ時  
（午前四時）地震中、同廿八日暮六ツ時（午後六時）大地震、  
是も格別のくずれ等承らず、同夜八ツ時（午前二時）地震有り  
中、惣体五月十八日夜八ツ時（午前二時）にも有り、八月廿日  
夜四ツ時（午後十時）にも有り、少しの地震は去十一月以来地  
震のなき月は一か月もなし、不穩年なり、如何成る変やあらん  
か」

この安政二年一〇月二日、有名な江戸安政大地震が起こった。  
この大地震について「万留帳」は書いている。

「十月二日夜四ツ時（午後十時）大地震有り、江戸前代未聞の  
大變、当殿御屋敷向上下共大崩れ居住相成り難き趣、尤も御前  
を始め奥方様にも都合能く御立退き遊ばされ、御別条はこれ無  
き由、御触御回状の趣同十一日夜庄屋方より申し来る。……」

右地震に付き大工木挽四拾人ばかり、仲間人足式拾人御召下  
に相成り追々出立、当村にても木挽兵助と申す者召出しに相



成り、十月十八日発足仕り候也。此の入用高巻石に銀式分式厘程づつ御領分へ仰せ付けられ十一月中に割元へ差出し申し候」  
翌安政三年八月にも江戸で大風・津波があり、遠藤屋敷が大破した。

「八月廿五日夜四ツ時（午後十時）頃より八ツ時（二時）頃迄、江戸表大風つなみも有り、殊の外大變の由、当御屋敷向大破に付き、末々迄申し触れ置き申す由、庄屋方迄回状参り候由」  
翌安政四年には痘瘡が流行した。

「安政四年十一月上旬より痘瘡の流行が殊の外重く、妙見中で痘瘡前の子供三十二人のうち十二人が死去し、外に二人が痘瘡過ぎて死去し、その外も残らず罹病した。ただし五助の子一人は『うへ痘瘡』（種痘）をしていて罹病しなかつた。今後はうへ痘瘡をするべきである」

安政五年二月二日には、牧村で火災があつた。

「二月廿二日夜九ツ時（午前〇時）頃当村太郎兵衛出火、尤も類焼なし、居宅五間に四間、草小屋九間に忒間、雪隠八尺に忒丈ノ棟数三軒焼失也、雨天にて人寄不都合、徳永村・剣村・名皿部村人足召連れ火事場へ駆け付け呉れ候也。河辺村・東又村・西又村始め其の外共翌朝漸く人足下され候様の事也」  
その三日後には大地震が起こつた。

「二月廿五日夜亥の刻（午後十時）大地震あり、嘉永七寅年十一月四日のより小さし。それより兩三日昼夜忒、三度づつ地し

ん有り、飛州白川辺大變の噂も有り」  
安政五年には大坂・江戸で不思議な急病が流行した。

「此の節江戸、或いは大坂辺の所不思議の急病流行、人多く死去いたし候趣、江戸城御屋敷歩中間相勤め候重吉より文通には、一ときころり八月二日より九月二日迄此の内に死に数十三万三千九百九拾七人、てらてらのつき上たはやり申し候と申す趣、此の如く急病はやり人多く死去仕り候由」

同安政五年一月二日昼九ツ時（正午）、越前越え油坂において、大島村の女性（穴馬池野という所から嫁に来ていた）と穴馬の者三人、計四人が、「雪あわ（雪崩）によりて突き埋れ死去」した。

この女性の実父が死去したため葬礼に穴馬に行き、雪がひどくなつたので、大島村へ帰るため弟二人のほか、計六人連れて油坂を越えてきて、向小駄良村に近い所で雪崩に遭遇したのである。

六人のうち二人は脱出して向小駄良番所迄来てこのことを話したので、村々呼び合い、大島村より近辺大騒動で掘り出したが、残りの四人は助からなかつた。大島村平助という者の女房であつた。穴馬池野という所から嫁に来たのであつた。

翌安政六年六月には洪水があつた。

「六月十二日夜洪水にて井水並びに橋の破損仕り候、当村樽丸井堰丸ぬけ、田畑井堰丸ぬけ、棚井々並びに島井破損いたし、他村人足千五百拾人、居村勤千人、其の外木材居村にて相勤め、御道方杉田直右衛門殿御出成され、同廿日より始め四日の日割

の処、三日にて相済み、廿三日には御帰り成され候なり」

安政七年五月にも洪水があった。

「五月十一日暮方大雨風あらく洪水出、久留主川は去る（去年の）六月の水より少し小く申し候、上の保川は増えて大きな由、所々橋々、井水、道等破失仕候、当村は田畑井丸ぬけ、其の外砂入り、かかみ石落ち、又所々本田ぬけ、山ぬけこれ有り、御願申し、御道方御見分の上人足貰い申し候、尤も何れの村々にも大分人足相願ひ候に付き、当村は他村人足継当村勤に御願申し候よしなり」

### 万延・文久〜慶応年間（一八六〇〜六八）

万延元年（一八六〇）五月二一日、大風雨により、「長良川上流上之保村川沿い向小駄良村にて耕地を害した」（『岐阜県災異誌』）

文久二年（一八六二）八月には、はしかが流行した。

「此の節町方辺下筋等はしかが大流行し、八月頃から牧村でも非常に流行した。八月中に牧村で五、六人が死去した。諸国共に大流行し、薬も平時より三倍に高騰した。麦蒔の時期で、農作業が一切出来ない家も多く、雇人なども一切かなわず、困つてしまった」

翌九月中も特に病多い月であった。

「麻疹後痢病の様に相成り、又は時疫のごとくに成り、多くの人が死去した。牧村では春以来十二、三人が死去した。市島村では七百石の所で、七十人が死去した。八幡では一日で七人位ずつ死去した。座頭中間六十人のうち十人が死去した。亀尾島村真行寺でも一日に七人が死去したことがあるという話だった。諸国並びに江戸表なども同様の風説であった。九月上旬頃江戸の死人八千人、八幡の死人二百人ということだった」

こうしたはしかの大流行のため、「万留帳」の筆者（粟飯原豊後正）は、七月一〇日妻妙光の一周忌に当たったけれども、延期し、さらに八月一日は先妻の三三回忌に当たり法事をしたかったが、これも「世上一統にはしかはやり、召使の者並びに近親病人に差支え」、やむを得ず延期し、のち一一月一〇日にようやくお経とお斎を勤めたのであった。

翌文久三年七月、洪水があった。

「七月十九日夕方存外の洪水があり、牧村で四つの井堰が残らず抜けたが、ほかには格別の事はなかった。明方筋はそれよりひどく、和良筋は特に大水で山崩れ等もあり、田畑はいうまでもなく、家屋なども水損があったということだ。八月末から九月二日、三日頃牧村の井水は他村の人足で修復した」

同じ頃、牧村では疫病により一家三人が死去した。

「当七月頃より当村伝四郎方に疫病相煩い、八月十五日継母死去、同廿七日継父死去、九月三日亭主死去、間無く三人死去、



気の毒申し難きばかり」

これ以後牧村では村中、喜八その外の家でも一人二人ずつ重い風邪の様な病気となり迷惑した。

さらにこの文久三年冬には、大雪の被害があった。

「十一月五日から雪降り段々つもり、冬中でおよそ六尺程も積もった。文化五辰年以來五十六年ぶりの大雪であった。毎朝の降雪を合わせれば一丈二、三尺にもなったであろう。猪や鹿は多く死んだ。もっとも鹿は少しで、大半は猪であった。およそ郡中で千二、三百頭ほど捕った。牧村では猪十六頭殺した。秋からの農作業は万事手おくれになり、大根・カブラなどは、大半雪の下になった。薪や漬菜など何れも困り入った」

慶応元年（一八六五）には、

「七月十五日暮れ六ツ（午後六時）頃より三日にわたり大豪雨、各川大洪水となった」（『岐阜県災異誌』）

翌慶応二年八月には大風被害があった。

「八月七日夜九ツ時（午前〇時）より追々大風に相成り、八ツ時（午前二時）頃長右衛門居家ふきつぶし、是は一昨年子年徳三郎古家を貰い作りし小家なり、翌八日朝に相成り、風しづまり見候所、当家門口の未申の方にありしそうき・めうたんの柿木根こぎに吹きたおし、橋大門にて桜式本ばかり、其の外柿木・梅木村中にては数知れず、棚井仁平の家三尺余かたぎし由、板根ふきむくり等事数知れず、近村等はより増して大風のよし

也、京都大變のよし、御本山仮御堂吹きつぶしたる噂也」

この大風については、長徳寺「年々諸見聞日記覚帳」（『大和村史史料編』）にも、

「慶応二寅八月七日夜、大風也。七十七年前、石割風よりの大風、惣木夥しくふきをりふきこぎ申し候」

と記録されている。

この慶応二年は不作の年であった。西気良村では、ゆとりのあるものから稗を集めて難澁者に配っているし、奥長尾村外四か村では、御救稗一〇〇俵の貸与を受けている。（『明宝村史通史編上巻』）

翌慶応三年（一八六七）から四年（明治元年）にかけて、江戸幕府滅亡、明治新政府成立という激動の時代に入る。明治以後の郡上災害史については今後の課題としたい。

## 「嫁さ考」にみる女の文化

佐尾 チドリ

県内各地区の農山村での女の生き方をひもといてみると、昔から戦前頃まで、そこにはそれが全く当たり前のような暮らしがあった。

女は娘から嫁アネサになり主婦カカサになり姑ババサとして一生を終ることを伝承するもので、これは民俗考の中で浅野弘光作「嫁さ考」に語られている。現在郡上市では一冊のみ図書館にあり、重要民俗資料として扱われ貸し出しは禁止となっている。

この書は七章からなり○カカサの火 ○カカサの居場所 アネサカカサの技 カカサは家の柱 ○娘の教育 アネサとカカサの風景 ○小論で自身は高齢者に聞き取りしたものと言われ、郡上の例も示されている。

私がこの書に関心を寄せたのは、田舎に住みながら農家生まれではなく、親同様に公務員として人生大半を過ごしたためか、この伝承を耳にする機会がなかったからかも知れない。

内容は、現在では考えられない女の逞しく凄い労働力に気働き、家族への情愛、それらが最終的には報われるように、家庭内にお

いて権威的な立場を持つことが出来、それが女の生き甲斐に繋がっていたというものである。特に嫁いだら嫁アネサとして主婦権カカサが移されるまで長い間の労苦や厳しい収容を得て、やっと生活の場でその役割を重んじての忍耐であり努力の重要性という物は理解できた。と同時に当時の生きるための尊ささえ感じさせられた。

当時は嫁となる前に、その資格のようなものがあって、労働力はもちろん、針仕事や読み書きも出来て、飾り気のない性格であることなど、生活技能が重視されていた。教育制度は確立されていても、女は修学率が低かったのにと不信感さえ覚えるが、その点一般的にお針屋へ通い、着物の縫い針、古着の仕立て直しや更に一枚の着物もその生命が終わるまで、舟帯・もんぺ・前掛け・襦袢・雑巾へと再利用。現在の断捨離の世とは異なり、その堅実さが伺える。なお、女でも日雇い・山仕事・下刈り・薪割り、炭焼き・モッコ担ぎ等も、娘のうちに経験をしておき、女のメインの仕事である炊事は、おかずといえは味噌汁と漬物だけだったが、その技能も縁談に大きく関わっていた。

嫁を貰うことは「手間をもらう」という時代、女は肉体労働が男に負けず出来て、その上気働きも知的で、自ら主導権を獲得していくという立派な意義があったのだと思う。

ある一日の生活の具体例として、男は出稼ぎに出て行き、カカサは朝五時起きで、牛の餌の草刈りと蚕の桑摘み。終わって朝食



をすますとすぐ畑を耕し野菜づくりをして昼食、また桑摘み、蚕の無い時期は機織り、続いて畑仕事。二時頃に茶漬けを食べ、また桑摘み畑仕事と、八時ごろまで外仕事。夕食後は洗濯や衣類の繕い、大勢の家族の世話や育児をする。

中でも子どもの教育面は、生活の知恵でその体験から成され、おや代々伝えられた諺を生かして教えるという伝承が実践されていた。育児前の子生みについては、絶対的なことのように、「子無しは去る」が当たり前だった。

家庭内では水回りやお勝手場（いろり）、納戸は女が支配できる領域で「家はカカサでもつ」と実証され、財布を渡されたカカサは、一層働く分野も広まり責任重大で、嫁入り先での家の金銭の収支、信仰の方法などは、その家風を受け継いで適応することが必然だった。

そこでこのようにいくら根性があったとはいえ、肉体労働中心に、年中働きっぱなしで、過労からくる疾病や栄養失調が気になるけど、このことは記述されていない。それは女として嫁いだ以上、鍛えぬいた体があり、どんな労働条件であろうと、自分の知恵と裁量次第で、しっかりした主婦カカサとして必要不可欠の居場所が位置でき、労働のストレスを吹き飛ばす安定した気持ちで、倒れないように支え続けていたのではないかと思われる。

この作者は、聞き取りの伝承・実例に基づいて、それを学術的に解説されており、読者が納得できる配慮もあり、事実図書館で

一気読みが出来る魅力があった。

この書を読み私は、雑感を述べたにすぎないけれど、当時生活の知恵や技術、そして読み書きもできる中で、自分の人生を振り返り、その過程を自己表現として書き残すという作業があったならという思いは残った。

時代が変わっても、現代の女の生き方にいろいろ考えさせられる貴重な女の文化歴史があったことをつぶさに学ぶことが出来た。

# 郡上郷土史研究会のあらまし — 研究活動の報告 —

## はじめに「大和町郷土史研究会」の発足

大和町史が資料編・通史編上下巻がそろったのは昭和六十三年十二月であった。完成までに十九年の歳月を要した。しかし「もし続けてきた歴史の灯火が消え去ったら、再び点火することは容易ではない」（当時の畑中浄園会長の弁）という見地から、当時の町長にも承認を受けて、平成二年十二月この研究会が発足した。

以下、創刊誌第1号から近刊第9号までに掲載されている主な研究論文を紹介する。

\* 町内五小学校変遷

武藤正文

\* 石仏調査報告

佐藤光一

## 「史苑やまと」第2号 52頁 平成九年三月刊行

\* 中国古銭調査

畑中浄園

\* 山城の歴史を探る

八幡町尾崎・尾壺山城の創建者はだれか？

佐藤とき子

\* 十五年戦争における大和町の戦争犠牲者数

白石博男

\* 遠藤岩松の養子とその後の話

杉田理一郎

\* 「金氏苛政録」について

佐藤光一

\* 白雲山観音堂太古寺・山田の庄の中心

高橋義一

\* 宝暦義民を支えた女たちを偲ぶ

佐尾千ドリ

\* 松尾城の落城とその昔を尋ねるよすが

日置 繁

## 「史苑やまと」第3号 55頁 平成十一年三月刊行

\* 東家菩提寺の木蛇寺と五山文学

畑中浄園

\* 大和町出土 黒曜石の原石と中部山岳・山の道

佐藤とき子

\* 「木蛇寺殿憤記」口訳

武藤正文

\* 太陽から道具になった女性

石神堯生

\* 犬も歩けば：釜淵地藏様のこと

佐藤光一

\* 東庄「笹川神楽」明建神社奉納について

日置 繁

\* 東家歌道の源 上西門院・定家・為家との関わり

高橋義一

## 「史苑やまと」第1号 B5版 49頁 平成七年三月刊行

\* 古今伝授の里大和町

畑中浄園

\* 東の常縁の弟正宗竜統が記した

「木蛇寺殿憤記」の語るもの(一)

佐藤とき子

\* 十五年戦争下の西川村

白石博男

\* 白雲山観音堂遺跡発掘調査

土松新逸

\* 内ヶ谷の今昔と「もち谷」

加藤文蔵



「史苑やまと」第4号 66頁 平成十三年六月刊行

\* 史実を調べる

有代和夫

\* 切立村喜史郎・前谷定次郎の脱走

白石博男

\* 行者・比岳尼・巡礼などにかかわる伝承や遺跡

佐藤とき子

\* 郡上の雄 東氏衰亡期の風景（その一）

杉田理一郎

\* 白雲山 観音堂山往古の祭り

高橋義一

\* 「臨池抄」（紹介）

佐藤光一

\* 赤ヒゲ作兵衛の今の子孫

小池久江

「史苑やまと」第5号 57頁 平成十六年六月刊行

\* 『大和町史資料編続編下一・二』刊行

高橋義一

\* 郡上城主三代目 稲葉氏のこと

佐藤とき子

\* 郡上の雄 東氏衰亡期の風景（その二）

杉田理一郎

\* 美濃紙の本場は神路中心の村々

高橋義一

\* 梅窓筆記

佐藤光一

「史苑やまと」第6号 89頁 平成十八年五月刊行

\* 郡上の雄 東氏衰亡期の風景（その三）

杉田理一郎

\* 一豊暁の鐘 秀吉夕日の鐘

高橋義一

\* 千代（見性院）の母と教如上人の接点を

鷲森旧事記と乗性寺過去帳から

佐藤とき子

\* 石徹白越県合併騒動小史

白石博男

\* 古文書の保護と活用の試み

佐藤光一

\* メキシコ生活事情 あまりにも人間的な社会

山田真人

平成二十年度 「大和町郷土史研究会」を「郡上郷土史研究会」と改称。（ただし会誌名は変更無し。）

「史苑やまと」第7号 72頁 平成二十年六月刊行

\* 常縁公の篠脇城恢復に関する私論エッセイ

杉田理一郎

\* 天正大地震と郷土

白石博男

\* 鶴来橋について

加藤文蔵

\* 転覆の歴史発見

稲作文化が郷や日本を作って来た

高橋義一

「史苑やまと」第8号 99頁 平成二十二年三月刊行

\* 宝曆騒動外伝 国家老・粥川仁兵衛の内室の話

杉田理一郎

\* 天保の飢饉と郡上

白石博男

\* 日の本の瑞穂の国や永久に栄えん

高橋義一

\* 凌霜塾と郡上村開拓団 特別寄稿

猪俣祐介

\* シベリア抑留の回顧 特別寄稿

丸山源二

\* 満州開拓悲話 特別寄稿

野田かつ子

\* 満州開拓聞き書き

石神堯生

「史苑やまと」第9号 52頁 平成二十五年四月刊行

\* 禿尾長柄帚第三 尊星王院鐘銘

武藤正文

\* 卍(まんじ)のはなし

佐藤とき子

\* 文化文政年間郡上の災害

白石博男

\* 不発に終わった万場の炭鉱

佐藤光一

\* 家系図を作ろう

河合利雄

\* 志比の宮大工 大久保吉郎衛門

桑田洋一

\* 私の戦争体験 救護看護婦として

阿葉家愛子

\* 郡上につたわる昔話・伝説目録

瀧日千代美



## 郡上郷土史研究会会員名簿

2015. 3. 31

|    | 氏 名     | 自宅郵便番号   | 自宅住所          | 自宅電話番号        | 備 考    |
|----|---------|----------|---------------|---------------|--------|
| 1  | 石 神 堯 生 | 501-4611 | 大和町万場2233     | 88 - 2413     | 理事・会長  |
| 2  | 井 俣 初 枝 | 501-4611 | 大和町万場578      | 88 - 2758     | 理事     |
| 3  | 大 坪 良 彦 | 501-5112 | 白鳥町六ノ里        | 090-1720-9394 |        |
| 4  | 大 野 一 道 | 501-4601 | 大和町大間見 4 - 1  | 88 - 2230     | 理事     |
| 5  | 大 野 紀 子 | 501-4601 | 大和町大間見 4 - 1  | 88 - 2230     |        |
| 6  | 加 藤 文 藏 | 501-4612 | 大和町剣43 - 1    | 88 - 2802     |        |
| 7  | 河 合 利 雄 | 501-4612 | 大和町剣30        | 88 - 3520     | 理事・書記  |
| 8  | 雉 野 尚 子 | 501-4616 | 大和町島1558福田    | 88 - 3564     | 理事     |
| 9  | 此 島 恵理子 | 501-4616 | 大和町島3607      | 88 - 3659     |        |
| 10 | 佐 尾 チドリ | 501-4613 | 大和町名皿部335     | 88 - 3544     | 理事・会計  |
| 11 | 佐 藤 光 一 | 501-4612 | 大和町剣57 - 1    | 88 - 3201     | 理事・副会長 |
| 12 | 佐 藤 とき子 | 501-4224 | 八幡町城南町287 - 2 | 65 - 4303     |        |
| 13 | 白 石 博 男 | 501-5121 | 白鳥町白鳥464 - 2  | 82 - 3235     |        |
| 14 | 高 橋 義 一 | 501-4612 | 大和町剣720 - 1   | 88 - 3792     |        |
| 15 | 瀧 日 準 一 | 501-4608 | 大和町牧845 - 1   | 88 - 2705     | 理事     |
| 16 | 瀧 日 千代美 | 501-4608 | 大和町牧1007      | 88 - 3059     |        |
| 17 | 田 中 篤   | 501-4616 | 大和町島1924福田    | 88 - 2792     |        |
| 18 | 旗 勝 美   | 501-4612 | 大和町剣380 - 2   | 88 - 2031     |        |
| 19 | 松 井 賢 雄 | 501-4601 | 大和町大間見1791    | 88 - 3991     |        |
| 20 | 山 田 白 陽 | 501-4616 | 大和町島1289      | 88 - 3437     |        |
|    |         |          |               |               |        |

---

「史苑やまと」 第10号

平成二十七年七月十日 発行

編集発行 郡上郷土史研究会  
印刷所 白鳥印刷